

いまこそ語り継ぐ

私の戦争体験記

～芦屋市民の記録～

平成18年7月

芦屋市・芦屋市教育委員会

目 次

発刊にあたって

1. 合掌 東山町 土井 静子……………1
2. 空襲の思い出 竹園町 柿元 久喜……………3
3. 爆弾と「にらめっこ」 竹園町 永江 勲 ……………5
4. 嗚呼九死に一生を得たかけがえのない吾が人生
 六麓荘町 三上 豊三郎……………7

発刊にあたって

多くの人々の命を奪い、まちを破壊し、家族を引き裂いた戦争から、61年が過ぎました。そして、日本は世界でも有数の物の豊かな恵まれた国になりました。

しかし、いまなお、世界の多くの国々で争いが絶えず、爆弾で家を焼かれたり、孤児になったり、心や身体に深い傷を負っている人々が大勢います。

このような悲しい思いをする人々をなくし、平和な世界をつくるためには、私たち一人ひとりが平和の大切さ、命の尊さをしっかり考えていかなければなりません。

いま日本では、戦争を体験したことのない世代が大半になりました。戦争がどんなに人々を苦しめるものであるかを、戦争を実際に体験した人々から聴く機会はますます少なくなっています。

そこで、芦屋市では、毎年7月下旬から8月15日の終戦記念日まで開催している“みんなで考えよう平和と人権”事業の一つとして、市民の皆様から戦争体験記を募集し、次の世代に語り継ぐ貴重な記録集として発行することにしました。

これが、次の世代を担う子どもたちが平和への思いを深めるきっかけとなることを願うとともに、この思いをご理解いただき、体験記をお寄せいただいた方々に深く感謝いたします。

平成18年7月

芦屋市・芦屋市教育委員会

合 掌

東山町 土井 静子

昭和20年5月11日、私は、阪神芦屋駅の北側にあった芦屋郵便局の2階で仕事をしていました。

正午頃、空襲警報が鳴り、大粒の雨が一度に降るようなザーという音がしたので、窓から西の空を見ると、B29の編隊がこちらに向かって来ており、急いで階下に下り、通用口のセメントにペタッとうつ伏せになり、両手の親指で耳を押さえ、残りの指で目を押さえ、口を固く結んでじっとしていました。

しばらくして防空壕^{ぼうくうごう}に逃げていた同僚たちが帰ってきて、「青木の川西航空がやられたらしい。」と聞き、仕事が終わってから電車の走っていない線路に入り、枕木の上をタッタッと歩いて、深江の駅を南へ出ると、吹き飛ばされた防空壕^{ぼうくうごう}があり、その横に土埃^{つちぼこり}をかぶった青黒い顔の死体が並べて置かれ、髪^{ぼう}の長いモンペ姿の女性、その横に2、3歳くらいの子ども、その隣に男性の死体があり、思わず手を合わせました。

旧国道（現在の43号線）に出ると、牛が目をむいて座っており、腸が飛び出していました。数メートル離れたところには、荷馬車が横に転がり、馬が足をそろえて倒れていました。爆風にやられたのでしょう。

もう青木の川西航空に行くのをやめて帰りました。

その日は、国鉄の芦屋駅（現在のJR芦屋駅）と岩園小学校に爆弾が落とされました。岩園小学校には、兵隊さんが大勢いましたから狙われたのだと思います。

8月15日正午に終戦の放送を聞いて、へなへなと座り込んで泣きました。張り詰めていた気持ちがくずれました。

私の家は、岩園町の少し高い所にあり、夜になって市内にポツリポツリと灯りが見えた時は、「本当に戦争は終わったんだ。」と思い、電灯の黒い布を取り除きました。

秋になり、長い間病気で寝込んでいた母が、
「何かおいしいものを食べたいなあ。」と言いますので、三ノ宮の国鉄のガード下^{やみち}にある闇市へ行き、大勢の人に押されながら、やっと「いかにぎり寿司」

を見つけ、1個10円のを10個買い、母の喜ぶ顔を思い浮かべながら、家に帰りました。

布団の上に起き直った母は、拝むようにして一口一口ゆっくり食べて、2個を食べ終えて横になり、「ご馳走さん。後はあんたたちで食べなさい。子どもより先に食べて悪いなあ。」と言いました。

明けて昭和21年1月に、母は亡くなりました。私と弟の二人で葬儀のことなど途方にくれましたが、弟が友達と二人で板を拾い集め、棺おけをつくり、母の身体を納め、借りてきた大八車に棺おけを荒縄でくくりつけ、薪たきぎを積んで三条の焼場まで運び、火葬を済ませホッとしました。

あの頃の私は、「いつ死んでも仕方がない。」という覚悟のようなものはもっていましたが、とにかく「今晚は空襲もなくぐっすり眠れるか、明日は何を食べようか」で頭がいっぱいで、その時その時を切り抜ける毎日でした。

戦後61年、折にふれて思うことは、「戦争とは、人と人の殺し合いと破壊を集団で行うこと」。よーいどんで戦争が始まることはない。必ず火種がある。それを見極めるため、報道の自由と公平な学校教育が大切です。

昭和の始めからの軍事政権による暗黒の時代を抜け出せたが、犠牲はあまりにも大きすぎました。

二度と過あやまちを起こさないことを誓い、拙文せつぶんを終えます。



西芦屋町にいまも残る機銃掃射跡

空襲の思い出

竹園町 柿元 久喜

鹿児島県立加治木中学校戦災記録誌

『昭和二十年八月十一日 母校焼失 その日その時』より

私の家は、中学校の運動場南入口より、新道の鉄道踏み切りに至る道路沿いにあり、学校へはものの5分以内で行けた。

当日はいつもの時間通りに登校した。遅れていた期末テストの予定だった。

しかし、登校直後の警報で授業は中止となり、校内清掃に切替えられた。

我々は、体育器具倉庫の片付けであった。運動場への階段を降りて、すぐ右側の溝川上に設けられた倉庫に行った。

上着を近くの朝礼台の上に脱ぎ、だから学校が炎上して帰宅する時はシャツのままだった。

倉庫の片付けに着手するか、しないかわからないうちに、米機が低空で北から南へ運動場の上空へと飛来し、機銃掃射と焼夷弾しょういだん攻撃が始まった。

近くに防空壕がなくとっさの判断で、グラウンドの最下段にあるコンクリートで囲まれた溝川の通水路へ飛び込んだ。中は暗く奥へ進むも外の激しい爆音が響き、入口の方で焼夷弾の油脂が飛んできて、それを被った人が「熱い熱い」という声もした。本田一君達とか聞いた。

通水路の入口周辺は混雑していて、入りきれない人々が運動場を横切って東の方へ走っていったらしい。同じ組の野中・小向得君達で、途中で機銃掃射を受けて負傷している。

通水路の中から外が展望できる場所で、外を眺めると校舎が盛んに炎上していた。溝川の中をプールに沿ったかたちで進み、プール北西角付近で路上に出た。

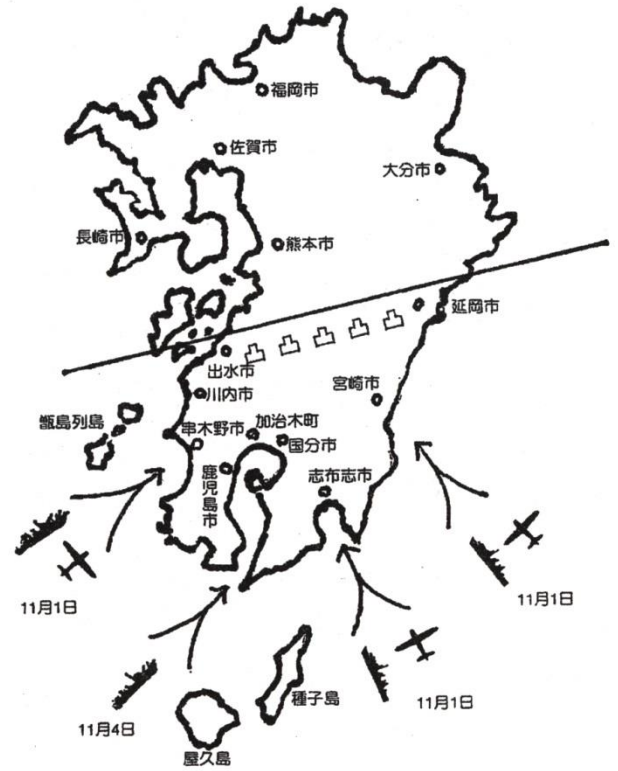
その後、学校農場の北路付近で、負傷した吉村計治君を永里先生が搬送中のため、これを手伝い私のゲートルで止血して、黒川の永里先生宅に行った。

ゲートルは戦後帖佐校で授業を受けた際に洗濯されて返却を受けた。

我が家もすっかり焼け落ちて、家族で日頃避難を予定していた永原の祖母宅

へ帰った。

全く悪夢の一日であった。



ごうおん
轟音を残して過ぎていった。

助かったと思った。

すぐに大爆発音と地響きがした。落ちた所は、それでも1キロメートルくらい離れていた。

後日落下地点へ行ってみたら、直径100メートルの円内の住宅は焼失、跡に深さ5メートル程の穴があいていた。

嗚呼九死に一生を得た

かけがえのない吾が人生

六麓荘町 三上 豊三郎

1 兵役及び大東亜戦争参加経歴

昭和17年1月12日	現役兵として大阪に於て北支派遣軍乙第3510部隊に入営（大阪難波別院に召集）
昭和17年1月15日	大阪駅発
昭和17年1月18日	宇品港出帆
昭和17年1月20日	釜山上陸
昭和17年1月23日	満鮮国境鴨緑江通過
昭和17年1月24日	山海関通過
昭和17年1月26日	連隊本部駐屯地北支那山西省太原に到着
昭和17年1月27日	本業基本集合教育受ける。
昭和17年4月30日	
昭和17年6月30日	太原陸軍病院初年次衛生教育のため派遣
昭和17年9月16日	衛生教育修業原隊復帰（陸軍衛生兵命）
昭和17年9月17日	大隊本部付中隊復帰部隊附衛生勤務 （薬室、治療室、病理試験室、休養室）
昭和17年11月28日	山西省五台山岳高地演習に参加
昭和17年12月11日	帰隊
昭和18年4月14日	ヨ号作戦（大行作戦）参加
昭和18年9月3日	帰隊
昭和18年9月13日	山西特殊教化隊（乙第3501部隊捕虜収容所）の 衛生勤務
昭和19年1月29日	教化隊勤務を免ぜられ原隊復帰
昭和19年1月30日	将第1463部隊に転属を命ぜられる。
昭和19年2月2日	太原出發

この頃より急速に戦局が悪くなりだした。

昭和19年2月25日	編成完結引続き隊附衛生勤務
昭和19年5月7日	北支那特別警備隊衛生要員として転属を命ぜられる。
昭和19年6月13日	甲第1415部隊編成完結引続き隊附衛生勤務
昭和20年9月20日	終戦
昭和21年1月27日	天津貨物廠入所武装解除
昭和21年1月31日	唐洽出發同日米軍のS L T. 上船内地に向い出發
昭和21年2月5日	佐世保着 故郷富山に向い出發
昭和21年2月8日	出生地 小杉へ到着

2 戦地の生活状況

- (1) 11月～2月頃までは、外気温－20度位で人間としての生地獄の生活を肌で感じ「生」を生々しく感じた。

しかし戦友共々助け合い郷土の同胞、親兄弟を思いこの苦しみに堪えた。

- (2) 朝、夕、全員点呼を実施最後に祖国に向い指揮者の号令で捧げ銃の禮拝^{れいはい}をして後「玉碎^{ぎよくさい}をもって皇国を守らん」と連呼した。

- (3) 夏頃にかけて強風が起こり雨は年に2～3回位しか降らない。

そのため土地は、カラカラに乾き、強風が吹く度に砂が舞い上がり一帯が黄色と化しそれはひどい黄塵と化した。

この風景を黄塵万丈^{こうじんばんじょう しょう}と稱していた。

兵舎は、総ての窓に紙で目張りをした状態での生活であった。

しかし、食卓は砂でザラザラになっていた。

そのため戦友は皆防塵眼鏡と云うもので目に砂の侵入を防いでいた。

- (4) 帰国は、運ぶ船がなく米軍輸送船で寿司詰の状態^{すしづめ}で6日間かかって本土に帰った。

3 生活に使用していた衣類防寒器材

1. 軍服（上衣）



総ての軍人は、この軍服を着用していた。色は、国防色という色で敵に見にくい色で汚れても目立ちにくい色であった。

2. 軍服（下衣）



1と同様でズボンとして着用していた。

3. 下着



軍服の下に着る一種の下着である。

これを直接着る。この縫い目に「虱」が寄生して苦しんだ。

4. 雑囊^{ざつのう}



一種の肩掛カバンで日用品、乾パン等入れて行軍した。

5. 背囊^{はいのう}



戦闘時には、この背囊に衣類、食料品等詰込み戦場に出動した。

6. 防寒帽



11月から2月にかけて気温が -20°C となり大変な寒さでありこれを防ぐ為このような帽子を使用し頭部を守った。

7. 凍結防止^{のう}嚢



1 1月から2月にかけて戦場は、零下 -20°C 近くになり携帯している飯は氷の様に凍結するのでこれを防止するため保温していたがあまり効果はなかった。

8. 凍結防止嚢



1 1月から2月にかけて戦場は、零下 -20°C 近くになり携帯している飯は氷の様に凍結するのでこれを防止するため保温していたがあまり効果はなかった。

9. 私物用物入^{かばん}鞆



国より支給されたものだけでは多くの物が携行できないので私物として使用していた小型鞆。

10. 劔帯



軍服の上より使用するベルトで拳銃、劔の着用装着に使用する。

4 所見

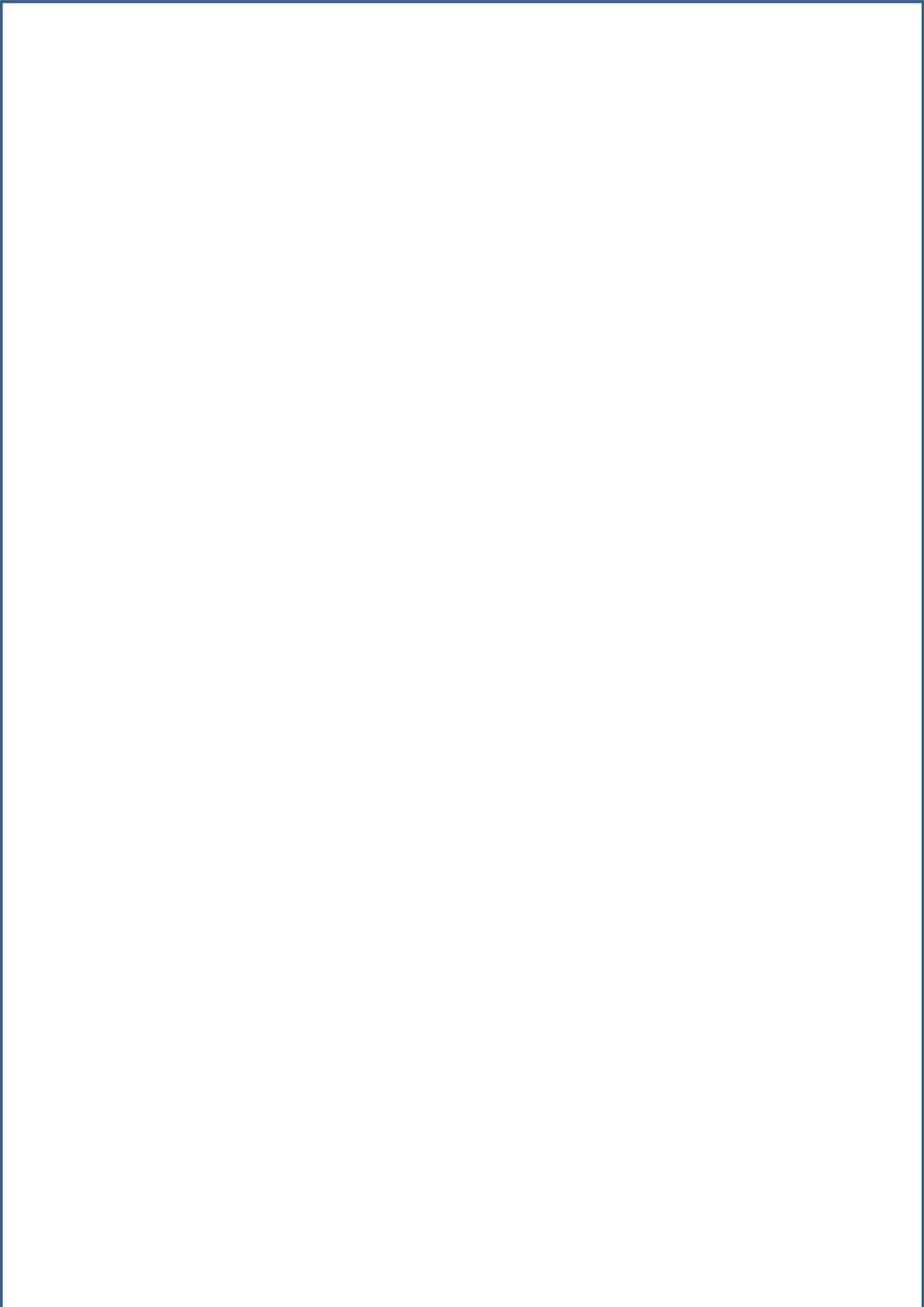
この戦争は、国家総動員法と稱^{しょう}し学生まで動員させられた。

そのため数知れぬ莫大な死によって実に優秀な人材が多く失われていった。

如何^{いか}に国の為と雖^{いへど}もこれは一体何であったかを当時の実体を思い出すと今でも何か夢を見ている心地でありその無念さを痛感している次第である。

以上

広報あしや 戦争関連記事



○「芦屋市広報 昭和32年（1957年）10月5日号より抜粋」
昭和32年9月10日「原水爆禁止芦屋市民大会」で発表された
被爆当時の体験談

被爆者 田中 まさ子さん

わたくしは世界で始めて原子爆弾が落されたその年に、広島に嫁ぎ、その日は爆心地から1キロ余り離れた所にいた。一瞬天地が暗黒となり、ピカッと光った途端、あたりの様相は一変していた。わたしもまわりの人も衣類は全くボロボロ、どの人もこの人も皮膚をただらせて全くの生き地獄だった。しゃく熱の太陽が痛む負傷に容赦なく照りつける中を、辛うじて生き残った人の列に交って宇品の病院にたどりついた。その日から毎日毎日、吐き気がする、高熱に悩まされ、水がほしいが飲むわけに行かない。ただれた肩先にいっぱいいうじ虫がわく。悲惨なわたくしを主人は泣く泣く介抱してくれた。隣保の中で幸か不幸かわたくしだけが生き残ったのだ。その時わたくしは妊娠していた。やっとのことで赤ん坊を生んだが、赤児もやはり原爆の影響をうけていた。ときどき黄色な液をはきつづける。そして12年たった今もまだ、その子は発育が遅れているのだ。

わたくしはもう絶対に原爆はイヤです。どうぞ皆様のご協力で、こんなものを世界中から一切なくして下さい。

○「広報あしや 昭和63年（1988年）8月1日号より抜粋」
芦屋における戦時下の生活

『芦屋市史』参照

本市が精道村から芦屋市へと「市制」をしいたのが昭和15年11月。市の発展もこれからという16年12月8日、太平洋戦争に突入。国内では、統制経済が実施され、主食類の統制に始まり、みそ、しょうゆ、肉、塩、ミルクなどが配給制となり、その後さまざまな生活日用品が制限されました。

芦屋公園では、国防婦人会の軍事訓練が行われ、士気の高揚が図られました。また国防婦人会による慰問袋づくりは、重要な仕事となり、出征兵士を慰める娯楽物や豆・アメ・手紙・カンヅメ・タオル、武運を祈る千人針などを入れて

戦地に送りました。

18年9月に学徒出陣、12月に徴兵適齢1年引き下げとなり、戦況はいよいよ激しくなりました。県立芦屋中学校生徒の勤労働員が始まり、農作業に従事したり、三木の陸軍飛行場や尼崎などの軍需工場へ出動しました。

19年11月サイパン島が陥落してからは、B29の本土来襲が始まり、本市は、20年5月11日に第1回の空襲を受け、6月5日、15日と相次ぎ、8月5日夜半から6日未明にかけて、いわゆる阪神大空襲を受けたのでした。市役所庁舎や山手・宮川小学校（当時は国民学校）では、草木で擬装をほどこしましたが、そのかいもなくこの4回の空襲で罹災者は総人口の5割、家屋は総戸数の約4割、学校校舎は実に8割を失ったのでした。

○「広報あしや 平成元年（1989年）7月1日号より抜粋」 米軍資料を翻訳し戦争の事実を語る

佐々木 和子さん

佐々木さんは、3年前から太平洋戦争時の日本本土攻撃に関する米軍資料の翻訳を続けている。今までに、その成果を「米軍資料にみる姫路空襲」（1986年9月発行）など3冊の冊子にまとめた。

そして今、芦屋の空襲の解明に取りかかっている。この秋には完成の予定だ。

佐々木さんは、「子どものころよく戦争映画を見に行きました。そのころは戦争というものは、自分とかけ離れた世界の事だと思っていました。しかし、結婚して3人の子どもの母となった今、戦争時の手記を読むと、今の私と同世代の人が書いている。なにか、遠い世界のことが、ぐんと身近な事のように思いました」と語る。

子どものためにも、戦争という事実を伝えなければと、この仕事を始めた。「私たちより年上の方は、戦争体験を語れますが、私たちにできることは資料で事実を語ることだけ」と話す。難解な言葉に出くわすと、大学院時代の恩師に相談したり、ご主人に教えてもらったりする。

「主人や子どもたちの理解がなければできなかつたでしょう。私は家庭の主婦としては落第です。」と明るく笑う。

8月に市民センターで開かれる「芦屋の戦災」展に参画し、忙しい毎日を送っている。

○「広報あしや 平成元年（1989年）7月1日号より抜粋」

「ひととき 4」 被爆のつちくれ

岡部 伊都子さん（随筆家）

小さな包みが届きました。

広島発の地名人名を見ただけで、うーん。5，6センチ立方体の被爆岩ガラ，かすかすになった黒茶色の焼けごもりが「持っていて下さい。一見の上は庭の一隅にでも」とある添え書と共に，はいつていました。

何とも言えない重み。白いお皿の上に置いて，つらい対話を続けています。

芦屋にお住まいの副島まち子さん著『あの日から今もなお』が出版されたのは，33年近く前のことでした。

小さな4人の子と産み月の妻をのこして夫は出征。突然の原子爆弾に逢（あ）つての恐ろしい状況を妻は必死に生き，病院は陣痛どころではない被爆者の治療，僅（わず）かな消毒ヨードチンキで自宅出産……。

その体験の，目に，心に，映ったことの率直な記録を，ドキドキ読ませてもらったことでした。

非常の際の沈着さ，着実さ。数々の異常を超えて，8月19日に出産された男児を入れた4人の男性と，女性ひとりのお子さん方は，以後の人生を互いに助け合いながら母を支えてこられました。すぐそばに住む千葉純一郎氏は，副島さんの長女孝子さんと結婚する時の思い，また，なかなか妊（みごも）りのなかった時の思い，何につけても自ら選んだ意味を問う複雑な感動を語っておられました。孝子発行の『親バカ新聞』には，送られてくるたびにめざましい成長ぶりの3人の少年の姿があります。

副島さん中心にすすんだ被爆者主体の体験映画「生命ある限り」が完成しましたとか。広島は復興ぶりさえなお傷ましく，人類的深淵を語りつづけています。あの日から44年。各地にあえぐ被爆者の援護はおろそかにして，すさまじい核兵器が，宇宙空間に，地上に，海底に，動いているんです。

○「広報あしや 平成元年（1989年）8月1日号より抜粋」

「ひととき 5」 あの、静寂

岡部 伊都子さん（随筆家）

1945年8月15日、正午。

父母とわたくしの3人は、そろってラジオの前に坐（すわ）りました。初めてきく抑揚の声。はっきりした意味はわからなかったのですが、そのあとのアナウンスや、音楽の扱い、静けさは身にしみました。

あの、まっさおに晴れわたった真夏の白昼の、明るさと、一帯、異様な静けさとは忘れられません。

それまで軍歌や士気高揚の行進曲ばかり流され、「死ね」「玉砕こそ名誉」「捕虜になるな」「神風は吹く」「尽忠報国」……。カツカツと高くひびいていた軍靴の音は消えました。

あの白昼の静寂は、空前絶後。不意に中断した映写フィルムが、いたずらに空白を流しているような、思考停止の時間でした。何しろ、人ごころついてからは、「天皇陛下のおん為に生き、その為あらひとがみに喜んで死ぬ民草」として、現人神絶対の教育を刷りこまれ、教えられ、それを積極的に信じ、従い、疑わなかったものでした。

兄も、義兄も、その友人たちも、すでに戦死。許婚者の生死は沖縄戦の渦にたずねようもなく、大阪のそれぞれの生家は、第1回の空襲に焼亡しています。

いったい、何のための戦争だったのか……。

呆然自失と、深遠の悲しみ。なぜ？なぜ？

夕方、従妹と2人、高師浜の海岸へ出ました。堤防には、大勢の人びとが、ずらりと坐って、黙って、真紅の夕日にむかっていました。思えば、大阪湾をへだてた対岸は芦屋あたり。そこでも人びとは、海を見て声なく坐っておられたのではありませんか。茜（あかね）うつろう海は、はるかどこまでも世界へつながっている湖……。

なぜ、1人のために万人が死ぬの。赤子（せきし）だなんて。「よろこんで死ね」だなんて。それまで考えてはならなかった「生」が、はじめて、おそろおそろの可能性として意識にのぼったんです。

あの夜は、皓々（こうこう）たる満月でしたね。

○「広報あしや 平成元年（1989年）8月1日号より抜粋」
爆弾の下で生きた日々を忘れまい
平和特集－「芦屋の空襲」から戦争の惨禍を考える

佐々木 和子さん

佐々木和子さん（36歳，三条町）は，3年前，大阪府平和記念資料室保管の米軍資料「姫路空襲」（英文60ページ）を翻訳し冊子に。今回，米軍の「戦術作戦任務報告書」をもとに，4度の芦屋の空襲を解明していただきました。

1945年（昭和20年）3月10日未明の東京大空襲から無差別焼夷弾作戦が始まりました。この作戦は，まず五大都市から行われ，6月15日大阪市が壊滅した後は，日本各地の中小都市がその目標となりました。また，軍需工場への通常爆弾攻撃も加えられました。

【5月11日に芦屋に初の空襲】

芦屋への初めての空襲であった5月11日の攻撃は，川西航空機甲南製作所（神戸市東灘区）を第一目標とした通常爆弾攻撃です。投下爆弾は，500ポンド（約250キロ）通常爆弾，投下時間は，午前9時53分から10時3分にかけてのわずか10分間。この川西航空機を外れた爆弾が，芦屋市域へも落ちたのです。

6月5日午前7時22分から8時47分，神戸市東部への焼夷弾攻撃が行われました。この損害は神戸市街地だけでなく，御影，芦屋，西宮にまで及びました。

6月15日に目標となったのは，大阪・尼崎の市街地です。この日の午前8時44分から10時55分にかけて，焼夷弾攻撃が行われました。この焼夷弾の一部が，芦屋市域にも落ちたのです。

【阪神大空襲では芦屋も攻撃目標に】

8月6日未明，西宮，御影の市街地に焼夷弾攻撃が加えられました。後にいう阪神大空襲です。この日攻撃に参加したB29は，グアム北飛行場を飛びたつた第314航空団の4群，134機，サイパン・アイズリィ飛行場を飛びた

った第73航空団の4群，135機の計269機でした。

当時アメリカ軍は，目標にあらかじめ中心となる点（平均弾着点）を決め，そこに優秀なレーダー操作手を乗り込ませた先導機に投弾させ，その火災を目印に後続機が投弾するやり方をとっていました。報告書には，芦屋の地名は書かれていませんが，平均弾着点の内の1ヶ所は，明らかに芦屋です。戦闘命令によると，この地点には，第314航空団の4群のうち3群が，投弾することになっていました。

【夜半125機が71分間投弾】

搭載弾は，M69・6ポンド焼夷弾を内蔵したE46集束弾，爆発すると即座に火災が発生し，次の機の目標を示すAN-M47A2・100ポンド焼夷弾，人員殺傷用のT4E4破砕集束弾，AN-M46照明弾でした。さらに先導機2機は，500ポンド通常爆弾を搭載することになっていました。

6日午前零時25分，先導機による投弾が始まりました。御影，芦屋を攻撃した第314航空団の125機は，午前1時36分までの71分間，約3，800メートルから約4，500メートルの高さから攻撃を加えました。同じころ，第72航空団の130機は，御影，西宮に投弾しました。

この結果，御影，芦屋，西宮の全市街地約24.5平方キロの29.6パーセントすなわち約7.2平方キロに損害を与えたと報告されています。

【爆弾穴の思い出】

古藪 信夫さん

古藪さんは，当時精道国民学校4年生。爆弾穴は，津知町5番と9番にあった。

5月11日朝，空襲警報で，土を掘り石で固めた簡単な壕（ごう）に家族7人入りました。何分か後，大きな振動と強い爆発があり，カミナリが10個ほど落ちたようでした。1分か2分のわずかな間です。家族全員抱き合っ，もう駄目かと，泣いたと思います。近くの家が，2，3軒つぶれ，白い煙が出ていました。たんぼに直径7，8メートルぐらいの大きな穴が2つあいていました。

7月に学童疎開で岡山県へ行き、10月に帰ってきました。家は、門だけが残っていました。穴はそのままでした。水がたまり池になり、草が茂り、花が咲き、魚がすみ、トンボが飛ぶようになりました。44年経った今では、そこは、家が建ち、駐車場になっていますが、この池の思い出は、もう忘れてしまいたい。

【空襲を4度受けて】

宮本 允子さん

宮本さんは、当時西芦屋町で、学童疎開せず、両親と一緒に生活。4度被災。

5月11日、私たちは、初めての爆撃を体験しました。校庭の開墾と堆肥集めが日課であった山手国民学校4年の私は、阪急芦屋川駅北へ投下された爆弾の犠牲者が、泥と血にまみれて、戸板で運ばれるのを見ました。

ある時は、警報によって隊列を組んで下校した友の1人が、爆風で片足をもぎ取られました。帰る途中、祖母がわが家の壕（ごう）へ誘ったのですが、友は、清水町の家までかけて帰ったのでした。

8月6日未明、阪神間は焼夷弾と小型爆弾の雨に見舞われました。小さな鉄片が、隣のおばさんの喉（のど）に食い込み、足を貫通しました。あちこちに火の手が上がり、明け方の空を焦がし、家も親も失い、妹を背にぼう然とたたずんでいた同級生の、ススと涙の横顔が今も目に浮かびます。

○「広報あしや 平成2年（1990年）8月1日号より抜粋」

平和特集 新川 初 講演録

「平和を考える講座－沖縄TODAY－」から

今回の平和特集では、国内で唯一地上戦が行われた沖縄戦の状況を紹介します。これは、2年前公民館が開催した、平和を考える講座の中で新川初さんが「ひめゆりの塔への誓い」と題して講演された体験談の一部です。この悲惨なできごとの主に、あなたご自身をおきかえてみてください。人権侵害・人間性否定の集約されたものが戦争であることを実感していただけたらと思います。

本市は、昭和60年「非核平和都市宣言」を行いました。2度と戦争をおこさないためにも、戦争の実態を若い世代にも伝えたいものです。

ひめゆりの塔への誓い

【戦争体験を語り伝えたい】

今を去る43年前、あの沖縄戦で、鉄の暴風雨と言われるほどの弾の中から、私はかろうじて命を授かり生きながらえてまいりました。

戦争体験が風化すれば平和は、遠ざかると言われております。私は戦争体験を少しでも語り伝えていくのが、自分に与えられた役目だと思っています。

【ひめゆり部隊】

当時私は、18歳で、沖縄師範学校の本科2年生として学んでおりました。その学校が皆さんご存じのひめゆり学徒隊として参戦した学校です。

しかし、参戦したのは私たちの学校だけでなく、沖縄のいろいろな女学校も、参戦し、多くの犠牲をはらいました。

昭和20年3月23日、きれいな青い海が真っ黒になるほどアメリカの軍艦がとりまいて、島へ大砲が打ち込まれました。大きな弾が真っ赤な鉄の破片となってさく裂し、周りにいる人・物・木すべてがやられてしまいます。私たちは、晩になってから、南風原（はえばる）の陸軍野戦病院へ看護要員として従軍する命令が下りました。

「いよいよ日本の女学生として、皇国のためにお役に立つときがやってきた。しっかり働いて立派な仕事をするように」と訓示を受け母校を後にしました。

【看護の日々】

私が配置された病院壕には、正規の看護婦・衛生兵・看護兵と患者が3, 40人横たわっていました。壕に送り込まれて来る患者は、顔面をやられて包帯でグルグル巻きにされた人、耳をもぎ取られて穴だけ開いている人、だるまのように両肢をとられた人など、いろいろなところをやられた人が横たわっていました。ですから壕の中は、泣き声と叫び声、兵隊の汗のにおいと汚れのにおい、そして、血の生臭いにおい、膿（うみ）の腐ったにおいなどが混じり合い、壕の蒸し暑さとで、今なら1分と入ってられないくらいの様相でした。その中で私たちは丸2カ月間暮らしました。

私たちは、軍医が回ってくるまでに次々と兵隊の包帯をはずし、さっと治療が受けられる準備をします。弾にやられ、火薬が少しでもついていると脳症やガス壊疽（えそ）、破傷風にかかるので、つけ根からゴシゴシのこぎりで腕や足を切ります。麻酔など有りませんので、死ぬより辛い思いで暴れ回ります。私たちもそばで励ましますが、当時まだ17, 8歳、泣き出しそうなのですが、泣いては日本の女学生の恥だと思っていますから、涙を流すことも自分たちの心の中にむち打って、自分で許さなかったのです。そうしているうちに、軍医の治療も、3日に1回が、1週間に1回、10日に1回となり、後はとうとう来てくれなくなりました。そして、私の壕も、看護婦さんがいなくなり、衛生兵も看護兵も元気になって部隊へと帰っていったりしてとうとう私と同級生、それに下級生2人の4人だけになってしまいました。それに反して、患者は増え、100人前後になり、こんなに大勢の患者の治療が私たち4人にゆだねられてしまいました。といっても、もう衛生材料はなく、治療するすべもありません。のたうちまわる患者を見に行くと、背中や傷口いっぱいとうじ虫がわいていました。しかし、このうじ虫には、衛生材料がなくなっただけで治療してもらいました。“うじ療法”といって、うじ虫が傷口の膿をきれいに吸ってくれるのです。このため、非常に痛いのです。膿を吸いつくして出てくるまでの間、のたうちまわる兵隊さんを目の前で見ているほうも辛く苦しかったです。

亡くなる前に息絶え絶えで「もう元気になって内地へ帰ることはないかもしれない。日本が勝利のあかつきには、国へ残してきた家族に会って、私がここで死んでいったことを話してください」と遺品を渡して欲しいと頼まれました。「きっとお会いしてお渡ししましょう」と約束すると、安心して眠るように死んでいかれた兵隊さんもありました。しかし、ご遺族には、どなたにも遺品を

渡すこともお会いすることもできませんでした。今でも申し訳ない気持ちでいっぱい、このことは、一生頭の中から離れることはないと思います。

壕を掘り、杭を立てる。丸太棒をかついでくる。めしあげ（食料運搬）に行く。埋葬をしに行く。便や尿の世話、あるいは遺書書き、遺品の預かり、あちこちで話を聞いてあげたり治療したり、また慰めたり……。休む暇もなければ寝る場所もありません。私たちは、丸太棒に腰をかけたたり、立ったまま壁によりかかってうつらうつらします。すると「学生さん」と呼ぶ声。そして飛んでいく。そういった睡眠をつなぎ合わせて1日の睡眠を取っていたと思います。

【追撃砲で足を負傷】

5月13日、私は、めしあげに行って炊事場で追撃砲にあたって左足を負傷してしまいました。手術は足の甲に突き刺さった破片をとり、そのまわりに真っ黒に焼きついた火薬のついた皮ふをコッヘルでひっぱってパチンパチンを切っていきます。麻酔もかけずに切るのですからたまったものではありません。それに今のように薄めた消毒液でなく、ヨードチンキの真っ黒な原液を塗布するのです。本当に痛い時には声などでないもので、ただ息を止めるしかありません。手術が終り、私はとうとう自分の壕の一番奥に、患者として寝かされてしまいました。

【南下命令】

5月25日に南下命令がでました。しかし、私たちのように、足をやられている者は、南下命令は聞いておりません。戦後になって知ったわけです。残された者は、青酸カリ、兵隊は手榴弾で自決するよにといいことでおいていかれました。

壕の中がザワザワと立ち動いている異様さを全身に感じました。私は、こんな壕の奥で一人で死んでいくのかと思い、両親や兄弟の顔が目に浮かんできて、どっと涙が流れました。しばらくすると「連れて行ってください」という声、自決する手榴弾のさく裂する音が聞こえてきました。しばらくして、下級生が私を連れに来てくれました。皆重たい荷物を運び、患者に肩を貸して道なき道を歩くのです。何度も敵の弾にあいながら、昼は潜んで、夜に歩きます。壕を見つけても、入れてもらえません。時には軍刀を振りかざして追い払われたこともあります。

まわりには、死体の山がいっぱいありました。頭とお腹だけが大きくて、手足が細くなっている子ども、お父さんお母さんの10人ちかくの人がずらっと横たわって死んでいる姿は、今でも脳裏からはなれません。餓（が）死していたのです。

ようやく、今ひめゆりの塔が建っているあたりの壕にたどりつきあちこちに分散して入りました。

【今度は解散命令】

6月18日に軍から解散命令が出ました。「女学生は入用がなくなったから自由行動をとれ」という命令です。自由行動といっても、南端に追いやられて、いく所は海しかありません。先生たちは「なんとか敵中突破をして北部へいきなさい」「しかし捕虜だけにはなるな」と。壕から出て、山の中腹にさしかかりました。死体の中を歩いているとき、足が引っかけたり歩けません。そうっと振り返って見ると、もう亡くなったと思っていた軍属のおばさんが手を差し伸べて、私のボロボロのモンペをつかまえていました。けれども私はどうすることもできずに振り返る元気もなく歩きだしました。敵中突破といっても、まったく戦況がわかりません。陸を歩いていいのか、海岸を歩いていいのか判断がつかえません。私は東海岸を通ったほうが潜み潜み行けるのではないかと考えました。途中、洞穴の中に潜んだり、ジャングルの中に潜んだりして行きました。手榴弾を持っている兵隊を見つけては、「殺してください」と頼んだこともありました。

ある時は岩陰から岩陰へ、走り抜けなければならないこともありました。敵の弾がビュンビュンとんできます。そこは、死体が山になっていました。死体はカンカンの太陽に照らされて腐り、真っ黄色でパンパンになっています。これを踏むと、ポーンと破裂して中の膿がふきだし、一面に広がります。走るたびに死体にたかっている銀バエが顔に当たり、弾が当たったかのように感じながらやっとの思いで向こうの岩陰につきました。

【平和への誓い】

私は、自分の戦争体験から考えました。戦争は人間が人間でなくなってしまう。殺しあう事が戦争です。過去の過ちをあからさまにし、反省し、正しい考え、行動をそこからうちだして良い方向へと改善していく。日本国民一人

ひとりが、世界に恥じない自覚と誇りを持てるような努力をしていかなければならないと思っています。それには、私たちが自分に与えられた命を感謝と尊さでかみしめ、命を大切に、自分を大切にすることを自分自身で育てて行かなければなりません。そうすることで、人権だ、平和だ、戦争反対だと叫ばなくても、幸福な平和をまねくと私は考えます。

終りに臨みまして、私は、亡き学友、恩師、また幾多の精霊の冥福を祈るために、ひめゆりの鎮魂歌を披露して話を終えたいと思います。

岩まくら かたくもあらん やすらかに
ねむれとぞいのる 学びの友は

○新川 初（あらかわ はつ）さん

大正15年京都に生まれる。昭和20年3月沖縄師範学校卒業と同時に、ひめゆり学徒隊として従軍。戦後30年まで沖縄の小・中学校に教員として勤務。のち、大阪の小学校で勤務。61年退職後非常勤嘱託として養護教育にたずさわるかたわら、平和教育に貢献。

○「広報あしや 平成4年（1992年）8月1日号より抜粋」

昭和46年29回にわたって神戸新聞に連載された「阪神大空襲」の記事について前モンテベロ市交換学生の山田さんと衣川さんに感想をいただきました。

「阪神大空襲」を読んで

山田 真規子さん

今回この記事を読ませていただくまで、この辺りも戦災に遭った、ということしか聞いたことのなかった私にとって、戦争体験者によるこの記録は想像を絶するほど生々しく痛烈でショッキングなものでした。

その中には当時、芦屋近辺の土層は粘っこいためいくら掘っても崩れないということで、支柱も木枠もない素掘りの防空壕が多かったそうですが、それが

災いしてか、ある母子が突然の空襲の際、急いでその壕にかけ込んだものの一瞬にして壕が崩れ落ち、その母親は鼻から上を地表にだし、体全体は土にのめり込んだままの状態です。身動きがとれず、ただ土中でしっかり子どもを抱いてただけで持ち上げることもできなかつた一などといった話があり、それを読んでいると思わず涙が出てきて、今こんなに平和で繁栄している芦屋に、かつてこのように悲惨なことが本当に起こったのだろうか、信じられない気持ちで一杯でした。

特に、実際の戦争をまったく体験したことのない私たちのような世代にとって戦争とは“ただ他人がやっているテレビゲーム”のような感覚でしかとらえることができず実際の戦争に対してでさえ傍観的で鈍感な見方しかできなくなってきました。

そして一番恐ろしいのは、これからこういった戦争を知らない世代がふえつづけ、戦争を恐れ憎み、二度と50年前に起こったことを繰り返してはならないという気持ちが、人々の記憶からだんだん薄れていくことだと思うのです。もうこれ以上悲劇を起こさないために、私たちは8月15日を迎えるにあたってもう一度、過去の苦い経験を思い起こす必要があるのではないのでしょうか。

今回、多くの貴重な資料をいただき、戦争について真剣に考えてみる機会を与えてくださったことに心から感謝したいと思います。

衣川 一真さん

昨年の湾岸戦争では、国連軍が悪者のイラク軍をやっつけたと、私の目には映ったのですが、双方とも自国側が正義と考えて戦ったわけです。

戦争に勝つというのはいろいろな意味がありますが、強い者が弱い者の考え方や価値観をむりやり力で変えていくのは間違いだと思います。

日本も太平洋戦争直後は、アメリカによって考え方や価値観がかなり変えられたと思います。結果的には、今の日本があるのだと思いますが…。

私たちは戦争を体験していない世代です。この芦屋にも空襲があつて、たくさんの方が亡くなられたそうです。戦争の悲惨さを知り、戦争に至った経過、その結果を冷静に判断し、戦争に対する自分なりの考え方をはっきりさせる必要があると思います。

国会でのPKO問題は、日本国民の戦争及び軍隊に対する意識が見直されるいい機会になったと思います。

私自身感じたことは、戦争の犠牲はあまりにも多く、二度と繰り返してはならない、そして、終戦から50年近くたった現在においても平和を維持していくことがいかに大変なことか、あと50年たったらどうなるのだろうかということだ。

戦争は言葉では表せないほど悲惨なものなのだということだけは、心にとめておきたいと思います。

○「広報あしや 平成4年（1992年）8月1日号より抜粋」
学童疎開の日記（抄）

松島 正之助さん

昭和20年5月11日の神戸市東部、芦屋西部の空襲で学童疎開がいそがれて、ようやく岡山県高梁町にきまった。

7月1日午前6時、精道国民学校に集合した223名の児童が教師に引率されて校庭を出発した。国鉄芦屋駅から電車が動き出す。我が子をさがす血走った母親たち…。

高梁町に午後3時頃到着、とりあえずの宿舎は小学校の講堂、幼い3年の児が自分の4倍もある荷物を引っ張っている。よしよし一緒に搬んでやろう。死ぬときは君達とともに、教師たちは皆、目を真赤にしている。

7月21日、毎日の日課が始まる。朝礼に続いて朝食。3食とも麦の薄いかゆに梅干とたくあん耐乏生活である。盛ってやるしゃもじを子ども達がじっと見つめる。今朝は腹具合が少し悪いからといって私の分を増配してやる。すると他室の子がのぞきこむ。

8月7日、芦屋大空襲と同時に広島空襲の情報が難を逃れてきた父兄によってもたらされた。鉄鎚で脳天をうたれたようなショックである。子ども達には知らさない方がよいということになる。

8月15日、終戦の詔勅を聞いて一同慟泣する。しかし、何か肩の力が抜けて極度の虚脱感をもつ。

○「広報あしや 平成12年（2000年）8月1日号より抜粋」
終戦記念日

海技大学校長 中村 峻さん

8月15日は終戦記念日です。過去の戦争を反省し、その歴史的な教訓をかみしめる日でもあります。私ども海事分野に生きる者にとって、戦争と海運の関係を決して忘れることができません。この関係を歴史的に見るなら、明治28年終了の日清戦争をはじめ、明治38年の日露戦争、大正3年の第1次世界大戦を通して日本の海運界は世界に多くの国際航路を開設しました。これは戦争に必要な多量の輸送船を国が借り受け、その借料、すなわち巨額の用船料を船会社に支払った結果、その資金によって成し得たものなのです。時あたかも欧米諸国の富国強兵政策を見習って、貿易の拡大こそわが国の取るべき道であり、そのためには工業化の推進、市場の拡大、商船隊の整備を必要としたのです。特に、第1次世界大戦の主戦場が欧州にあったため、ここでの生産が減退し物資需要の激増は日本産業界に未曾有の大盛況をもたらしたのです。今様に言うならば戦争バブルだったのでしょう。そしてやがてバブルははじけ、昭和初期の大恐慌にと時代は進み、ついに第2次世界大戦への路線を進むことになったのです。この大戦により日本商船隊は壊滅的な打撃を受けたのです。すなわち、米国の戦略は日本への輸送路の遮断にあり、このためには丸腰の商船を撃沈することでした。結果として開戦時の保有船舶数の80.6%に相当する2,534隻の船舶を失ったのです。それに伴って6万331名の船員（海軍戦没者の約3倍）が海の藻屑もくずとなりました。

終戦後生き残った船員は、帰郷を一日千秋の思いで待ち、二度と海には帰らない決心も束の間、戦後直ちに海に戻り640万人の復員と帰還輸送に従事したのです。戦中戦後船員は実によく国に尽くしたと思います。しかし国は船員に何を報いたのでしょう。

この8月は、戦没者や原爆犠牲者の慰霊等々、さまざまな行事があります。しかし、私の隣のおじさんは終戦直前自宅で爆弾の破片に当たり亡くなりました。やはり戦争犠牲者の一人なのに慰霊も無ければ、ましてや何の保証もない。戦争なんて所詮しょせんは不合理なもので理屈をこねて語りつなぐよりは、むしろ「平和」の維持について語りつぐ方が大切な気がします。その意味から言うと芦屋

市制施行60周年などを記念して「平和モニュメント」を作ろうとしている芦屋市民に大きな拍手を送りたい。

○「広報あしや 平成22年(2010年)7月15日号より抜粋」

あのころ、日本は戦争をしていた

高瀬 湊さん

昭和3年、私はこの芦屋で生まれ、10年には今の県立芦屋高校の場所にあった宮川小学校に入学しました。

小学校のころは、学校から帰るとすぐに、近所の子どもたちと宮川や打出の浜で遊んでいましたよ。

当時の宮川はとても野趣に富んだ川で、人工的なものは何もなく、ホテルもたくさん飛んでいました。川は浅く、ちょっと集中豪雨なんかあるとすぐに氾濫状態。夜中にその危険を知らせる打出天神の半鐘が、カンカン鳴るようなことが何度もありました。昭和9年の室戸台風のときには高潮が打ち寄せて、浜打出の辺りまで水が来たのを覚えています。

谷崎潤一郎の「細雪」に出てくる昭和13年の阪神大水害のときには、その前年の夏までに宮川の護岸工事が終わっていたので、宮川から東の町々は被害にあわずに済みましたが、呉川町など西側は芦屋川のはんらんした水に浸かりました。

小学校3年生だった昭和12年7月には日中戦争が始まり、軍事体制が強化されていく中で、小学校でもいわゆる「少国民」教育が行われるようになり、「ぜいたくは敵だ!」といった考え方が全国民に徹底されていきました。

昭和16年4月、私は灘中へ進学。当時、芦屋には4つの小学校がありましたが、各校からだいたい5、6人くらいが神戸一中や灘中学に行っていたように思います。

余談ですが、神戸一中と灘中とでは、校風・気質においてまったく異なり、当時、どちらかといえばやや体力に自信の持てない児童とか、一中の軍国的色調に今一つ馴染めないと感じる家庭の子弟、いわば“ぼんぼん”たちが、得てして灘中を選択する傾向にあったようです。

しかし我々の中学生生活は、日本が太平洋戦争に開戦した昭和16年に始まり、

授業の大半は勤労奉仕で、敗戦の昭和20年に卒業という、文字通り戦争に終了したものでした。

戦後、我々昭和ヒトケタ世代は、新生日本の再建を担おうと、経済戦士としてモーレツに働き始めるのですが、私も海外で活躍する夢を持ち、商社マンとしての歩みを始めました。

しかしまた、私の42年間に及ぶ商社マン生活は、母社3社が消滅するという、実に数奇な運命を辿ることとなりました。

私の手元には今、焼夷弾で焦げ目のついた表紙の、子どものころに書いた日記が残っています。こうした日記をもとに、人生を振り返って書いたものが私の著作となりました。

そして今、82年近く住み続けたこのまちに、私は“母乳”にも似た郷愁を感じているのです。

○高瀬 湊（たかせ みなと）さん

昭和3年8月27日、精道村古新田（現竹園町）生まれ。昭和26年神戸経済大学（現神戸大学）卒業後、江商へ入社。42年3月、兼松との合併により同社を退社し、安宅産業へ。52年7月安宅産業崩壊により伊藤萬へ。同社取締役から伊藤萬石油販売代表取締役社長に就任。平成4年退任。著書に「すかたん灘中学徒動員物語」（光人社）・「昭和ヒトケタ商社マン」（朝日新聞社）・「遊べ、あそべ！」（理論社）・「ある中学生の戦中日記」（東方出版）・「追憶の墓標」（新風舎）・「僕たち“神戸っ子”の少国民時代」（神戸新聞総合出版センター）など。

○「広報あしや 平成23年(2011年)7月15日号より抜粋」

第2次世界大戦と芦屋～戦時下の教育・暮らし～

【太平洋戦争下の芦屋】

市制実施の昭和15年には、日独伊三国同盟が結ばれ、前年勃発した第2次世界大戦にイタリアも参戦し、日本の軍事勢力も大陸より南方に浸出を試み、国内ではまた大政翼賛体制・経済新体制が断行されるなど、内外ともに暗雲色濃き情勢であった。そして芦屋市が発足して1年、新市としての拡充事業もようやく軌道にのってきた時、わが国は悲惨な太平洋戦争に突入するに至った。

かくて順調に発展してきた市勢は、戦時体制のもとに一頓挫をきたし、市の自治制もついに昭和18年の地方制度改革でほとんど失われてしまった。その間、市の財政は年々黒字を続け、歳入の約半分を繰り越す有様で、風水害（*昭和13年・阪神風水害など）の被害も全く回復し、さらに新都市計画の立案をみたが、戦時下その実現をはばまれた。なお町名地番の大改正は、昭和19年1月10日より実施された。

市民の生活も年々窮迫の度を加え、昭和15年にはすでに物資の統制配給が強化され、以後生活のすみずみにまで及んでいった。さらに大きな打撃は、戦局の悪化とともに迫りきた空襲であった。昭和17年以来警報の発令は市民を脅かし、昭和19年より20年に入ると、現実に各地の被爆は激化し、緊迫せる状況下に本市でも学童疎開等を断行したが、ついに5月11日の空襲に続いて6月5日・同15日、さらに8月5日の壊滅的大空襲で、この美しい街も廃墟と化し去った。

戦禍は、爆弾97・焼夷弾約3,200投下、死亡139人、重軽傷150人、行方不明2人、家屋全焼壊2,841軒・半焼壊213軒、り災者18,171人に達し、市民の約50%、家屋約40%がり災し、ことに学校校舎は80%を失った。戦災による損失にはなお測り知れないものがあつたのである。

<昭和31年発行「芦屋市史」より>

【戦時下の学校の様子・集団疎開】

昭和46年まで、本市の市立小学校は精道（明治5年開校）・宮川（昭和2年開校）・山手（昭和9年開校）・岩園（昭和9年開校）の4校だけでした。

昭和16年4月、小学校が「国民学校」と改称され、いっそう軍国主義の風潮が強化されていく中、19年2月にはみそ汁給食・戦時学校給食が開始され、



翌年3月まで続きました。またこのころの運動会も戦時色一色で、男子の体育の授業でも棒剣などの訓練（写真・左）などが行われました。

戦時中の小学校高学年男子の体育 精道小学校

■戦時下の教育

昭和16年に、小学校が「国民学校」と改称されてからは、いっそう軍国主義教育の風は強くなりました。防空訓練や勤労奉仕（さつまいもづくり等）の行事も加わりました。

<「芦屋今むかし」より>



精道国民学校／疎開先（現・高梁市）での3年生児童と教師

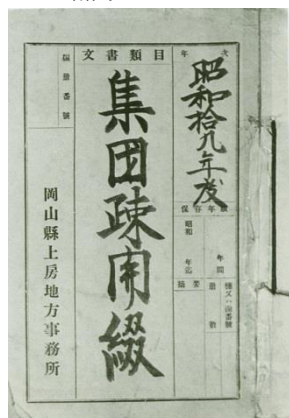
■学童疎開

昭和20年4月から空襲が激しくなり、6月には精道・宮川の両校に集団疎開の指令が出されました。

田舎に縁故のある学童は個人疎開、また縁故のない3年生以上の学童は集団疎開することとなりました。

疎開先の岡山県との交渉の結果、6月24日、貨物列車に分乗して、精道国民学校学童223人は上房郡高梁町（現高梁市）へ、宮川国民学校学童207人は真庭郡落合村へそれぞれ疎開することになりました。

集団疎開中は、地元学童らと学習に励むほか、燃料の薪を集めたり、食料不足を補うために魚を獲ったりさつまいもの栽培をしたりしました。



受け入れ先の「集団疎開綴」

一方芦屋では、昭和20年8月6日の空襲で、両校の木造校舎が焼失しました。そして、ついに8月15日の終戦を迎えます。

なお、疎開先から児童たちが帰ってきたのは、この年の10月でした。



疎開先から精道国民学校に帰ってきた児童たちは、燃え落ちた校舎を前に立ちすくんだ。

【戦時下での市民生活】

戦争の長期化によって、市民生活は「国民精神総動員運動」のもとに、貯蓄増強・国債消化協力をはじめ、日常に必要な物資の供給も困難となり、昭和15年7月には、精道村役場に配給業務を担当する『産業課』が新設されました。また家庭用燃料などの配給は、いわゆる『隣組』の隣保組織が活用されました。

昭和16年から、米・麦・食料油・酒類・卵・パンなどの統制が始まり、みそ・しょうゆ・塩・ミルク・青果物・魚介類・鋳物製品なども配給制となり、19年には休閒地の利用も進められ、食糧事情は窮迫状態となりました。

戦時体制の下、市の自治制も失われていきました。

召集令状によって動員されていく各家庭の中堅労働人員は増加し、市人口の男子数は減少の一途をたどりました。

戦争犠牲者が急増するにつれ、「銃後奉公会」・「青年団」や「婦人会」・「大日本国防婦人会」なども創設され、出征軍人やその遺家族の慰問・送迎・慰安会・勤労奉仕・国防演習などの活動を行いました。

昭和19年になると、戦局はいよいよ窮迫し、芦屋中学校（昭和15年開校・現県立芦屋高等学校の前身）の生徒たちも勤労働員に出動するようになり、そ



冊子「家庭防空」の表紙

の東校舎は川西航空機の学校工場となりました。この学校工場は、昭和20年8月5日の空襲で焼失するまで続きました。

そして、本市が大空襲に見舞われた翌6日には広島に、また9日には長崎に原爆が投下され、ついに昭和20年8月15日正午、天皇の詔（みことのり）が発せられ、終戦を迎えることになったのでした。

○「広報あしや 平成27年（2015年）5月1日号より抜粋」

芦屋タイムトラベル 今から70年前（昭和20年〔1945〕5月11日） 津知遺跡の爆弾穴と芦屋の空襲

今から70年前、昭和20年（1945）に芦屋市は米軍の空襲を受けました。『新修芦屋市史』によれば、芦屋市の空襲は、昭和20年（1945）5月11日、6月5日、6月15日、8月5日～6日の4度と記されています。これらの空襲によって、市街地の184万5千平方メートルが焼失し、被災者は総人口の約5割に当たる1万8171人、被災家屋は総戸数の約4割に当たる3054戸に及びました。

平成14年（2002）に実施した津知遺跡（津知町）の発掘調査では、昭和20年5月11日の空襲で投下された250キログラム爆弾の爆発によって生じた爆弾穴の一部を発掘しました（写真）。この爆弾穴はクレーター状のもので、直径が約12メートル、深さが1.5メートル以上ありました。

この日の空襲では、米軍のB29型爆撃機102機が武庫郡本庄村（現在の神戸市東灘区青木）にあった川西航空機甲南製作所を攻撃目標として飛来し、高度3700～6100メートルからの精密爆撃を行いました。午前9時53分から午前10時3分までのわずか10分間に、250キログラム爆弾が2千

発近くも投下され、甲南製作所は壊滅的な被害を受けました。大阪府警察署の報告による被害状況は、死者888人、重軽傷者1989人、行方不明者29人、全焼・全壊2841戸、被災者2万168人となっています。

一方、米軍の戦果報告によると、この空襲で投下された爆弾は、250キログラム爆弾1787発で、甲南製作所に確認された爆発箇所は759発分でした。この数を単純に引き算すると、1028発の爆弾が甲南製作所を外れて落ち、芦屋市域に被害をもたらした爆弾も含まれることとなります。この津知遺跡の爆弾穴は、甲南製作所から北東方向に約1.5キロメートル離れた位置であることから、甲南製作所を外れた爆弾によるものと考えられます。

冒頭で述べたように、芦屋市は4度の空襲で多数のかたがたが亡くなり、市街地の40パーセントが焼失しました。このような惨状が、今から70年前に本市で起こったのです。ところで、芦屋市であった機銃掃射についてはほとんど記録が残っていません。もし、前記の4度の空襲以外の機銃掃射等についてご存知のかたがおられましたら、ぜひお知らせください。



津知遺跡で発掘された爆弾穴

○「広報あしや 平成27年（2015年）8月1日号より抜粋」

芦屋タイムトラベル

今から70年前（昭和20年〔1945〕8月5日深夜～8月6日未明）
芦屋のまちが焼け野原になった 一阪神大空襲の惨状一

芦屋市は、昭和20年（1945）5月11日、6月5日、6月15日、8月5日～6日の計4回、米軍による空襲を受けました。これらの空襲によって139人のかたが亡くなり、市街地の約4割が焼失しました。

昭和19年（1944）から始まった米軍のB29爆撃機による日本本土空襲は、当初は軍需工場を攻撃目標にしていたが、目標が雲で見えずに破壊

できないことが多かったことから、焼夷弾しょういだんによる絨毯爆撃じゅうたんで市街地を焼き払う方法に切り替わりました。これは一般市民を殺傷する非人道的な無差別爆撃で、昭和20年3月10日の東京大空襲を最初に、名古屋(12日)、大阪(13日)、神戸(17日)が焼き尽くされました。5月以降は中小都市も空襲の対象となり、6月5日朝に受けた2度目の神戸大空襲では、芦屋市にも焼夷弾が投下されました。6月15日午前の大阪・尼崎空襲でも芦屋市が爆撃されました。

そして、8月5日深夜～6日未明の空襲が、芦屋市に最も大きな被害をもたらしました。この空襲は、西宮から御影の市街地が攻撃目標で、「阪神大空襲」と呼ばれています。8月5日深夜に飛来したB29が大阪湾上空に照明弾を投下し、市街地が真昼のように照らし出されました。間もなく、130機のB29が芦屋市街から香櫨園、西宮市街へと焼夷弾を投下し、火の手が次々と上がり、火災がみるみるうちに広がっていきました。焼夷弾の雨が降り注ぎ、一面火の海となる中、爆音と高射砲の強烈な音が、逃げ惑う人々の叫び声をかき消しました。芦屋の市街地は一面炎に包まれ、火の粉で真っ赤な地獄の空となりました。この空襲の惨状を語った市民の証言があります。「浜芦屋町の家族はお父さんが出征中で、お母さんと子ども2人が防空壕の中で蒸し焼きになり、小さくちぢんで死んでおられたのは気の毒でした」、「防空壕の中をのぞくと、お母さんが1歳の次女を抱き、5歳の長女と3歳の長男が足を伸ばし、壁にもたれて死んでいました。窒息死でした。防空壕の入口で焼夷弾が燃えていて、出るに出不れなかったんです。みんなロウ人形みたいでね。顔だけはオレンジ色に変わっていました。もうかわいそうで」。この空襲で、芦屋市内には焼夷弾が約1500発、小型爆弾が約40発投下され、死亡者89人、重傷者44人、全焼2732戸、被災者16379人を出しました。

今から70年前、芦屋が戦場となりました。空襲によって多くの市民が亡くなり、何の罪もない多くの子どもたちが犠牲になりました。生き残った人々の多くも、心に大きな傷を負ったのです。戦争の恐ろしさをしっかりと後世に伝えていかなければなりません。



空襲の火災で溶けたガラス瓶（月若町出土）

芦屋市内の戦争遺跡

戦争遺跡

NO.	所在地	見つかった戦争遺跡
1	六麓荘町	米軍の機銃弾
2	船戸町	空襲による火災で焼けた地面
3	松ノ内町	焼夷弾が着弾した痕跡
4	月若町	空襲による火災で焼けた地面・溶けたガラス
5	西芦屋町	機銃掃射の銃弾の痕跡
6	清水町	空襲による火災で焼けた地面
7	春日町	空襲による火災で焼けた地面
8	打出小槌町	空襲による火災で焼けた地面・焼夷弾1個
9	宮川町	空襲による火災で焼けた地面・溶けたガラス
10	茶屋之町	空襲による火災で焼けた地面
11	津知町	250kg爆弾による爆弾穴1基・空襲による火災で焼けた地面・溶けたガラス・戦災の瓦礫を埋めた穴・焼夷弾6個
12	若宮町	空襲による火災で焼けた地面
13	呉川町	空襲による火災で焼けた地面



NO.1 米軍の機銃弾（六麓荘町出土）
（芦屋市教育委員会 所蔵）



NO.4 空襲による火災で溶けたガラス（月若町出土）
（芦屋市教育委員会 所蔵）



NO.5 住宅の擁壁に残る機銃掃射の銃弾痕跡（西芦屋町）



NO.11 津知町で発掘された 250kg 爆弾の爆弾穴の一部
（発掘調査後、消滅しました）



NO.11 津知町から出土した焼夷弾
（芦屋市教育委員会 所蔵）

防空壕

NO.	所在地	推定される種類・構造	備考
1	六麓荘町	庭に作られた橋の基礎内の部屋を利用した家庭用防空壕	防空壕について、地権者の証言を得ている。
2	六麓荘町	横穴式石室を改造した半地下式家庭用防空壕	
3	山芦屋町	横穴式石室を改造した半地下式家庭用防空壕	
4	山芦屋町	近現代に構築された石室である半地下式家庭用防空壕	
5	西山町	素掘りか木枠などをもつ地下式家庭用防空壕	埋土にはガラス瓶等が多く含まれていた。
6	西山町	煉瓦の壁をもつ地下式家庭用防空壕	
7	西山町	壁を石材で部分的に補強する地下式家庭用防空壕	室部床面から戦時中から戦後のガラス瓶などが出土。
8	西山町	煉瓦の壁をもつ地下式家庭用防空壕	防空壕を造られた方からの証言を得ている。
9	三条町	地下室を利用した家庭用防空壕	
10	三条町	コンクリート管を用いた半地下式家庭用防空壕	戦前～戦後のガラス瓶・陶器などが出土。
11	三条町	コンクリート管を用いた地下式家庭用防空壕	
12	三条町	地下室を利用した家庭用防空壕	
13	親王塚町	地下式家庭用防空壕	
14	親王塚町	支柱をもつ地下式家庭用防空壕	
15	大原町	煉瓦の壁をもつ地下式家庭用防空壕	

16	大原町	煉瓦の壁をもつ地下式家庭用防空壕	防空壕であったという証言を得ている。室内から戦後の歯ブラシ等が出土。
17	月若町	家屋床下の支柱をもつ家庭用防空壕	埋土は、粘土ブロックを多く含んでいた。
18	月若町	煉瓦の壁をもつ地下式家庭用防空壕	床面に排水孔を1穴もつ。
19	三条南町	コンクリート管を用いた半地下式家庭用防空壕	コンクリート管は上半部が消滅。下半部西側のみ検出。
20	業平町	地下式集団用防空壕	出入口部の階段は、検出長 330cm、最大幅 195cm。
21	打出小槌町	煉瓦の壁をもつ地下式家庭用防空壕	
22	若宮町	煉瓦の壁をもつ地下式家庭用防空壕	



NO.20 発掘された集団用防空壕の入り口（業平町）

（発掘調査後、消滅しました）

【用語説明】

50音順

- がくとしゅつじん
学徒出陣 … 第2次世界大戦末期の兵力不足を補うため、20歳以上の文化系学生を徴兵し、出征させたこと。
- がくとどういん
学徒動員 … 第2次世界大戦中に、国内の労働力不足を補うため、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食糧増産に動員されたこと。
- きじゅうそうしゃ
機銃掃射 … 航空機などが装備した機関銃や機関砲を使用して、地上または海上の敵をなぎ払うように射撃すること。
- けいぼうだん
警防団 … 地域の消防と防空などのために組織された団体。昭和14年（1939年）結成、昭和22年（1947年）廃止。
- こうしゃほう
高射砲 … 敵戦闘機を撃墜するための地上火器。海軍では高角砲と言っていた。
- こくぼうふじんかい
国防婦人会 … 昭和7年（1932年）に誕生した婦人団体。出征兵士の送迎や慰問などを行った。正式名称は大日本国防婦人会。
- こくみんがっこう
国民学校 … 昭和16年（1941年）公布の国民学校令により、小学校が国民学校に改められた。初等教育学校で初等科6年、高等科2年の8年となる。昭和22年（1947年）まで存続する。
- こくみんふく
国民服 … 第2次世界大戦中、広く男子が着用した軍服に似た衣服。
- こっかそうどういん
国家総動員 … 戦争遂行のため、国家の全ての人的・物的資源を最も有効に利用できるように統制運用すること。
- かんし
コッヘル（鉗子） … 刃のないはさみのような形をした、先端部に鉤のある金属製の手術器具。
- しょういだん
焼夷弾 … 家屋・物資の焼き払いや火災による人員殺傷を目的とした、焼夷剤が入った爆弾。
- しょうこくみん
少国民 … 年少の国民。少年少女を指していった言葉。
- しょうしゅうれいじょう
召集令状 … 在郷軍人や国民兵などを召集する命令文書。
- しょうちよく
詔勅 … 天皇の意思を表示する文書の総称。
- ぞうへいしょう
造兵廠 … 旧日本陸海軍で、兵器・弾薬などの製造・修理などを行った工場、機関。
- そかい
疎開 … 空襲などによる被害を少なくするために、都会の人や物資を地方に移すこと。

だいほんえい
大本営

… 日清戦争から太平洋戦争までの戦時中に設置された日本の
さいこうとうすいきかん
最高統帥機関。

ちょうよう
徴用

… 戦時中などに、国家が国民を強制的に動員して、兵役以外の一定の業務につかせること。

B 2 9

… 第2次世界大戦中に登場した、ボーイング社が開発した米国の大型爆撃機。

ぼうくうえんしゅう
防空演習

… 空襲を想定した実地訓練。

ぼうくうごう
防空壕

… 空襲の際に避難するために地中に掘られた穴。

ぼうくうずきん
防空頭巾

… 戦時中、空襲の際の落下物から頭部を守るためにかぶった綿入れの頭巾。

ヨードチンキ…

ヨウ素（ヨード）の殺菌作用を利用した殺菌薬・消毒液。

1970年代以前、家庭用消毒剤として広く流布していた。



ウォーターパーク（陽光町）